

とあるSS隊員の一生

kuraisu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近ナチス関連の書物読みふけつて、こんな人生を送った人もいたんじやないかなーと思つて書いてみました。

とあるSS隊員の一生

目

次

1

とあるSSS隊員の一生

彼と関係があつたほとんどの者が口を揃えてそう言う。そしてそれ以上に、正義感と使命感の強い人物であつたと。

もし生まれる時代と場所が違えば、このような運命を辿るようになるとにはならなかつたかもしれない。

1922年ドイツのハンブルクの中産階級の家庭に生まれたロツエ・ゲンハルトは、優しく誠実な両親に可愛がられて幸せな幼少期を過ごした。

第一次世界大戦後のドイツはヴエルサイユ条約によつて定められた天文学的な賠償金や、賠償金の滞納を理由にルール地方占領したフランスの行動により、ハイパーインフレーションが発生して不況の真つただ中にあつたが、ロツツエの父は優秀な人物だつたし、務めていた仕事も大企業だつたので、職を失うことなく働き続けることができたのだ。

しかし1929年にアメリカのウォール街で株価の大暴落がきっかけとなつて世界恐慌が発生すると、そもそも言つていられなくなつた。ドイツの経済は、外資つまりアメリカの資金で回つているのが実状だったのである。なのでアメリカが国内の不況を理由にドイツに資金を投下してくれなくなつたらドイツの経済は大打撃を受けた。

その結果、ドイツの失業者の数は増加の一途を辿り、ロツツエの父も不況の煽りを受けて1930年に勤めていた会社が倒産してしまい、失業者の仲間入りをしてしまつた。

とはいゝ、それでも彼ら一家はまだマシな部類であつたといえよう。ルール地方が占領されてから、ドイツ政府が発行する紙幣を信用しなくなつていたロツツエの父は、毎月の給料の一部を貴金属に変えて貯蓄していたからである。貯蓄を切り崩しながらそれなりの生活を暮らすことができたのだ。

だが、その頃のロツツエの家族の空気は悲観的になつていた。自分の能力を信じ、自分の仕事に誇りを持つていた父にとつて働けなくなつたのがよっぽどショックであつたらしく、昼間から酒を飲んで泣

き言をいうようになり、母はそんな夫を慰めるという状況が多くなつた。

ロツツエは父が「元はといえ巴、あんなふざけたヴエルサイユ条約を結んだゾチ（社民党の蔑称）の革命政府とやらが全部悪いんだ。ホーエンツオレン朝の時代ならこんな屈辱絶対に認めなかつたに違ひない。最後まで徹底抗戦したはずだ」と泣きながらぼやいているのを何度も聞かされた。

第一次世界大戦終戦時、戦線はまだドイツ国外にあつた。終戦数か月前ですら、ある戦線でドイツ軍は連合軍から勝利をもぎ取つたりでくるくらいには、ドイツはその気になれば、まだまだ戦える状態にあつたのだ。

それなのにドイツが講和した理由は国内での経済的・社会的な混乱が無視しえないレベルに達していたことに加え、ドイツ首脳部が当時のアメリカ大統領ウッドロウ・威尔ソンの“十四か条の平和原則”や“無併合・無賠償”などを信じたからでもあつた。

……知つての通り、この信頼はパリ講和会議での最初からドイツと対峙していた国々、特に主戦場になつたフランスの激しい反対をウイルソンは抑えることができず、厳しすぎる講和条約を強制されるという形で裏切られたのだが。

とにかく、簡単に説明するとそんな事情があつたわけだが、そんな経緯を知らない一般国民にとつて、革命政府は賣国奴野郎どもの集まりという見方をする者が少なくなかつた。そしてその認識は大恐慌の発生によつて信じ込む市民たちが急増したのである。

そしてそんな状況に後押しされて、1933年1月30日に国民社会主義ドイツ労働者党（通称・蔑称ナチス）党首アドルフ・ヒトラーがドイツ帝国宰相に任命された。そして同年の3月24日に憲法を超えた権力をヒトラーに与える全権委任法が国会に提出され、賛成多数で可決された。唯一の指導者ヒトラー総統が君臨する独裁国家、後の世にいうナチス・ドイツ、第三帝国が成立したのだつた。

第三帝国首脳部は国民生活を改善するためにあらゆる手段を使って雇用を生み出した。その副作用で国庫の金が減り、将来破綻確定に

なるほど浪費しようが、気にせずに。なぜならドイツはヴェルサイユ条約によつて分断された領土を取り戻し、かつてビスマルクが行つたようにドイツを統一しなければならないというのがNSDAP首脳部の見解であつたのだ。

いや、あのような小ドイツ主義的統一よりも上、大ドイツ主義に従つてオーストリアを含むドイツ民族が暮らす地を統一せねばならないと信じていたのだ。そして国家財政の負担はドイツの領土であるべき地を不當に支配している政府から奪えればいいという考えだつたのである。

しかしそんなブラツクな第三帝国首脳部の思惑など、一般国民にはわからない。彼らは単純に失業者が減つたことを喜び、景気が回復したことを喜び、それを成し遂げた指導者兼帝国宰相アドルフ・ヒトラーを救世主として崇拜した。ロツツエの一家もそのひとつであった。

だからこそ、1936年に将来のNSDAPの幹部を育成する専門学校の生徒が募集された時にロツツエは真っ先に志願した。試験は難関であるとされていたが、両親の協力もあつて試験に見事合格し、1937年1月15日に開校されたアドルフ・ヒトラー・シューレ（通称AHS）に入学した。

ロツツエは優秀な成績をおさめたが、AHSで暮らす中で教官としてやつてくる黒衣の親衛隊（シュッツスタッフル）、通称SSの隊員に強い憧れを持つようになり、積極的にSSの教官と交流し、SSの教官もロツツエを高く評価してあることを約束した。

それはユーゲント・パトロール（当時ドイツの青少年は皆ヒトラー！ユーゲントに所属し、街中をパトロールして風紀の取締を行つた）の際に、大きな成果をあげれば卒業後すぐに士官としてとりたててやるというものだつた。教官は可愛い生徒にちょっとしたリップサービスをしただけのつもりだつた。

しかしロツツエは持ち前の正義感からパトロールに熱心だつた上に、成果次第でSS士官としてとりたてられると約束されたものだから疲れを知らずに働き、小規模だが共産党の残党からなる反ナチ組織

の拠点を発見してしまった。

これに驚いたのは当然SSの教官である。なにせ本当に大きな成果をロツツエがあげてくるとは思っていなかつたからだ。教官はロツツエに対する評価を数段あげ、卒業後すぐにロツツエをSSに所属できるように人事局に圧力をかけた。

その結果、1939年にロツツエはAHS卒業すると、すぐに國家保安本部第III局、親衛隊情報部^{SD}国内諜報局に配属することが内定したという通知を受け取つた。ロツツエは喜びのあまりガツツボーズした。SDと言えばSSの中でもエリートが集まる組織である。そのことを知つたロツツエの両親も大いに喜んだ。

そして入隊宣言が行われた。

「私はドイツ国首相たるアドルフ・ヒトラーに忠誠と勇気を誓う。私は總統と總統に任命された上官に生涯の服従を誓う。神のご加護のあらんことを」

この宣言が終わつた後、あこがれの黒衣の隊服が与えられた。しかし自分のだけ周りのと少し違うことを不思議に思いながら隊服を広げると、SS曹長の襟章がついているのが目に飛び込んできた。教官は約束を守つてくれたのである。

その隊服に着替え、誇らしく思いながらSDの仕事に従事した。ロツツエは優秀で周りから能力を高く評価された。一部ロツツエが若すぎるが故の妬みから嫌う者もいたがSS自体が若い組織だったのを気にする者は少数だつた。

1939年10月1日に正式入隊するための教義問答が行われた。これはSSの教義を信じ、他の宗教との決別を意味する宣言だつた。一応ロツツエはプロテスタント系キリスト教徒だつたが、さしたる信仰心はなかつたのでためらいはなかつた。

「何故我らはドイツを信じ、總統を信じるのか？」

「我らが神を信じるからである。ドイツは神によつて神の地に作られた国家であり、總統アドルフ・ヒトラーは神が我らにつかわした人だからである」

「我らは誰のために働くのか？」

「我が国民と總統アドルフ・ヒトラーのためである」

「我らは何故服従するのか？」

「我らの信念ゆえに。ドイツ・總統・国民社会主義運動・SSを信じるゆえに。また我が忠誠ゆえに」

この宣誓は、ロツツェにとつて生涯忘ることのない神聖な誓いとなつた。他人から何と言われようとも、それを貫き通すことになるのであるが、それはまだ先の事であつた。

とにかくこれで名実ともにSS隊員になつたロツツェだつたが、順風満帆に進むというわけにはならなかつた。ロツツェの上司がSD長官ラインハルト・ハイドリヒと対立して左遷されてしまつたのである。ロツツェはこの人事に対して不満を持ち、人事局に抗議したがそれがハイドリヒの耳に入つてしまつた。

そのせいで1940年5月に忌避を買つたロツツェも独ソ戦に備えて再び組織されるAINザツツグルツペンに左遷された。ただ、書類上は栄転として処理されたらしく、18歳と言う若さでロツツェはSS少尉に昇格。士官となつた。

だが、AINザツツグルツペンの一分隊の指揮官として配属されたロツツェにとつてそんな昇進はなんの氣休めにもならなかつた。AINザツツグルツペンは第III局のSDだけでなく、第IV局、ゲシュタポ、第V局クリポといった他局の人員だけでなく、武装親衛隊やら外国人補助警官とかいった国家保安本部以外の所属の人員も混ざつた混成部隊であり、隊を隊として運営するだけでもロツツェには一苦労だつた。

1941年6月22日、独ソ戦が始まると百二十個師団ものドイツの大軍がソ連領内になだれ込み、AINザツツグルツペンもその後ろからソ連領内に入った。AINザツツグルツペンの任務は戦場後方における不穏分子（パルチザン・共産主義者・ユダヤ人等）を排除するのが彼らの仕事である。

ロツツェは現地人とは可能な限り友好的に接触するよう努めた。NSDAPが唱える世界観において、彼らは劣等人種であり支配すべき対象であつたが、なればこそ優良人種アーリア人として寛大に接し

てやるべきと考えたのだ。

親身になつた彼らの話を聞いたロツツエは憤りを禁じ得なかつた。ロシア共産党が彼らにやつてきた圧政はとても現実のこととは思えないほど恐ろしいものだつたからである。共産主義者が西欧文明の破壊者であるというNSDAPの主張は百パーセント正しい。奴らは倒すべき巨悪である。共産主義者とその元凶であるユダヤ人（NSDAPの宣伝では共産主義はユダヤ人の陰謀の產物とされていた）を根絶やしにせねばならないと強く決意した。

正義の心に燃えるロツツエ率いる銃殺分隊は悪と断定した共産主義者とユダヤ人を見つけ次第銃殺していった。彼が率いる部隊は精力的に、あるいは熱狂的に、任務を遂行して行つた。

だが、問題がなかつたわけではない。特に外国人補助警官はソ連に併合された国の出身の人間もいたので復讐の味に酔いしれていたのか、明らかにユダヤ人ではないし共産主義者でもない相手を銃殺することもあつたので、ロツツエは彼らにそれなりの処分を下さねばならなかつた。

「あいつら、絶対にアインザツツグルッペンの任務を履き違えてるだろ」

ロツツエの認識ではアインザツツグルッペンは文明の脅威である共産主義とユダヤ人を根絶することが目的であつて、東方の現地人を絶滅させることが目的ではないのだ。彼らが復讐に狂う理由はロツツエにも理解できだが、だからといって何の罪もないロシア人にその罪を着せるわけにはいかない。

また現地人の間で独立の動きが出ていているのも頭痛の種だつた。ロツツエらドイツ軍は彼ら劣等人種を惡夢のような共産主義体制から解放して従属させ、長い時間をかけてドイツ化させるために来たのであつて、彼ら現地人達が独立国家を建設するのを助けるためにきたのではなかつた。なので劣等人種のくせに民族主義を掲げて独立を唱える愚か者どもの処分も担うことになつた。

1943年にハイドリヒがチエコのバルチザンに暗殺されたといふ報告が入り、SDに戻つてくるよう左遷されていた元上司から連絡

が届いてロツツエは喜んだ。スターリングラードでドイツ軍が敗北してからというもの、悲観論が自分の部隊で囁かれるようになり辟易していたのである。

しかし1944年にソ連軍がドイツ本国東部まで進出してくると、ロツツエは武装親衛隊への転属を願い出た。スターリングラードで一敗したからといって、いきなり追い詰められるわけでもあるまいと去年はたかをくくっていたのだが、いきなりソ連軍が強くなつたように連勝しだして、まるで逃げるよう自分が本国に戻ってきたことが恥ずかしく思えたからである。

あるいは昨年にイギリス軍の空襲で、ハンブルクの父と母が死んだという事実が彼を命知らずにさせたのかも知れなかつた。

武装親衛隊は度重なる激戦で人材を消耗していくのでロツツエの転属は歓迎して受理された。武装親衛隊への転属と同時にSS中尉に昇進した。これはロツツエに臨時編成された大隊を率いらせるための処置であつた。用意された大隊は定数の半数程度しかない中隊を集めめた大隊とは名ばかりの部隊だつたけれども。

ロツツエは一人でも民間人を逃がすために、果敢にソ連軍に抵抗した。そのため部隊の損耗率は凄まじいものがあつたのだが、圧倒的物量を誇るソ連軍の侵攻を食い止めるることはできず、後退を続けた。

そして1945年5月にロツツエがバーメン・メーレン保護領（ドイツの保護国時代のチエコスロバキアの名前）の首都プラハで総統の自決の伝える放送をラジオで聞いた時、彼の部隊の残存兵員は二十数人しかいなかつた。

「自決した？」
マイン・フューラー
「我が總統が、ドイツの救世主が……」

總統の自決を知つたロツツエの衝撃は凄まじいものだつた。生涯の忠誠を誓つた主君が自決してしまつたのである。彼は悲しみを隠すことができなかつた。

そしてロツツエは翌日の朝には賛同者と共に地下に潜る決意を固めていた。總統亡き今、どれだけ抵抗しても結果は得られないと判断したのだつた。かつてソ連の共産主義者どもがパルチザン化してドイツ軍に抵抗してきたように、今度は自分たちSSがそうすると決め

たのだった。

ロツツエは泣く泣く自分の誇りであるSSの軍服を脱いで地面に埋めると、ソ連軍の砲撃でほぼ廃墟になつた民家から服を拝借して一般人に変装し、難民の列の中に紛れ込ん西へ向かつた。途中、アメリカ軍の検問に取り掛かつたが、あっさりとバスされて拍子抜けし、ついで彼らの間抜けさを嘲笑つた。アメリカ軍の兵士達はまだ20前半の青年がSS大尉だとは想像だにしなかつたのである。

ロツツエたちはイギリス軍占領区のハンブルクへと向かつた。自分の生まれ故郷なら拠点としてうつてつけであると考えたのだが、イギリス空軍を中心として、終戦までに七十回以上もの空襲を受けたハンブルクはロツツエの記憶の中にあるとそれとまつたくの別物になつていた。ハンブルクはただの瓦礫の山がひろがるだけだつたのだ。

自分の両親を奪い、故郷を灰燼に帰したイギリスへのロツツエの憎悪は、おそらくはこの時に決定的なものとなつた。イギリス軍占領区で彼が率いる残党が起こしたイギリス軍への攻撃というか、嫌がらせの数々がそれを物語つている。

もちろんイギリス軍もやられてばかりの無能ではなく、何度もロツツエのグループに反撃して打撃を与えていたし、1946年9月にはロツツエに重傷を負わせて捕らえることにも成功している。この時に既にイギリス軍の捕虜の中にロツツエの顔を知っている者がいたので、かつてロツツエがAINZETZGRUPPEの分隊指揮をとつていたことがイギリス軍の知るところとなつた。

AINZETZGRUPPEは連合国では絶滅部隊であるという認識であり、来年にニュルベルクでAINZETZGRUPPEに所属していた戦争犯罪人の裁判がアメリカ軍主導で行われることになつていた。だからイギリス軍はロツツエの傷が癒え次第、ニュルンベルクへ移送し、アメリカ軍当局へ身柄を引き渡すことを決定した。

12月に傷が癒えて意識が回復したロツツエは礼儀正しく振る舞い、イギリス軍士官の警戒感をほぐすことに努めた。そしてニュルンベルクへの移送中に士官の監視の目を巧みにだまして列車から飛び

降り、冬の吹雪の中に消えてしまったのである。

吹雪の中、生命の危機を感じるほどの寒さを耐え、ロツツエは都市部から少し離れたところにある農村に逃げ込んだ。そしてアンスバッハ州のある街で暮らしたのだが、故郷がアメリカ軍に占領されて仕事を奪われたからここで働くかせてほしいと心優しい農民一家を騙して農業に励み、時たま都市部に出て元党员の地下組織と接触したりしながら平穏に暮らした。

1949年5月23日に民主主義国家のドイツ連邦共和国（西ドイツ）、10月7日に共産主義国家のドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立すると、ロツツエはドイツに対する忠誠心を捨てた。彼にとつてドイツとは国民社会主義国家のドイツであり、その偉大なドイツを否定する新しいドイツなど彼の中ではドイツではなかつたのである。

1950年になると元党员の地下組織から南米に脱出しないかという声をかけられた。彼らが言うには東西冷戦の勃発により、連合軍を形成していた諸国は彼らが言うところのナチの戦犯追及がおざなりになつていて、自国内にいるならともかく、他国にまで逃げた戦犯を追いかける暇は惜しいというのだ。

いや、それどころか、国民社会主義は反共産主義でもあるので、西侧諸国的一部は尖兵としてナチの戦犯を利用する動きすらあり、大戦中親独的だった反共軍事独裁政権の多い南米諸国に行くのであれば、西側諸国は戦犯の逃亡に気づいても見逃す公算が高いというのだ。

ロツツエは悩んだ末、南米に行く決意を固めた。未知の地である場所に行く不安はあつたが、戦犯リストに自分の名前が載つている現状では表立つて動くことはできず、西ドイツの農村で燐り続けるよりはマシだろうという思いが強かつたからであつた。

こうして南米に渡る決意を固めたロツツエは元SS隊員の為の組織、通称オデツサの援助を受けて秘密裏にイタリア南部の港町へと移動し、アルゼンチンの領事館の職員の助けを借りて船でアルゼンチンへと渡つた。アルゼンチンには元NSDAPの党员や元SS隊員が独裁者ファン・ペロン政権の支配に協力しており、ロツツエもそれに倣つた。

1951年に第三帝国の輝く空の英雄、ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐が同胞を支援する為に設立した“ルデル・クラブ”的でドイツ系パラグアイ人という新しい身分証明書を手に入れたロツツエは手に入れて喜んだ。

「でも、これで大丈夫なんですかね？」

自分と同時に新しい身分証明書を手に入れたSS曹長が不安げに聞いてきた。彼は連合国に戦犯認定されてはいなかつたが、1944年の總統暗殺未遂事件の際に、容疑者を処分する銃殺隊の指揮をついていたので身の安全の為に南米に逃げてきたのであつた。

「大丈夫だろう。この南米で戦犯が逮捕されたって話は今のところあまり聞かないが」

「そうですよね。将官だつて大丈夫なわけですし」

あくまで噂にすぎないが、強制収容所建築及び新兵器開発の指揮をとつたハンス・カムラーSS大将、ゲシュタポ長官ハイインリヒ・ミュラーSS中将、全強制収容所の総監リヒャルト・グリュックSS中将といった大物もこのクラブを利用して新しい身分を手に入れて南米で暮らしているらしい。彼らより格は劣るがユダヤ人を大量移送したアドルフ・アイヒマンSS中佐、“死の天使”の異名をつけられたヨーゼフ・メンゲレSS大尉なども利用したというのをロツツエは聞いていた。

SSからも追われる身だつたカムラーSS大将がルデル・クラブを利用するなど信憑性が薄い話も混ざつてゐるが、全部が嘘とは考えにくい。そしてこんな有名なSS隊員の誰かが捕まれば、確実に大きなニュースになる。だが、そんなニュースを聞いたことがないということはたぶん大丈夫なのだろうとロツツエは結論した。

とにかくこうして身の安全を確保したロツツエは南米諸国を転々としながら反共闘争に加わつた。いまだに国民社会主義の理想を捨てていないロツツエにとつて、共産主義者は排除すべき対象だつたのである。

1959年にロツツエはボリビアのあるドイツ人社会に腰を落ち着かせた。ここには元NSDAP党員による互助組織が存在し、新し

い生活を始めるにふさわしい場所であると考えたのである。

1960年5月25日、南米でリカルド・クレメントという偽名を名乗っていたアイヒマンが逮捕されたというニュースがイスラエルから飛んできた。このニュースは南米に潜伏しているロツツエ達戦争犯人たちに深い衝撃を与えた。具体的にはもつと危機感を持たねばならないと思い込むようになり、元SS隊員同士の団結力が強化された。

1961年にロツツエは現地で親しくなったドイツ系ボリビア人の女性と結婚した。ロツツエは39歳、相手は27歳とかなり歳の差がある結婚だつたが、相思相愛の彼らの結婚を否定するものをはおらず、華やかな結婚式があげられ、二年後には子宝にも恵まれた。

1972年、ボリビアの影の有力者であるという『中佐』とロツツエは互助組織を通じて接触した。聞けば『中佐』は元SS大尉で、当時フランスのある都市の治安責任者で、フランスのレジスタンスや共産主義者、ユダヤ人相手に激しい戦いを繰り広げた猛者で、当然連合国の戦犯リストにも載っている。

「あなたの名前なら聞いたことがあります。フランスではかなり有名だつたはずです。どうやつて助かつたのですか？」

目の前の『中佐』は間違いない大物である。内部の情報が謎に包まれているソ連領内でユダヤ人の処分に加担した自分と違つて、並大抵のことでは逃げ遂せるとはロツツエには思えない。

「敗北を認めない同志を集めつつ、連合軍の協力関係が崩れるまで粘り強く潜伏した。イギリス軍とアメリカ軍に何回か捕まつたが、脱走するのは簡単だつたよ。そして予想通り冷戦がはじまるとアメリカ軍に自分を売り込んで身の安全をはかつた」

想像以上に危険な橋を渡つていたことにロツツエは驚いた。

「大丈夫だつたのですか？ アメリカなど信じて？」

「いや、実に誠実な反共主義者が多かつた。彼らと大戦で敵同士だつたのは最大の不幸だよ。なにせ共産主義が人類の文明に対する脅威であるという認識において私たちは一致していたのだから。今からでも手を組めると信じて私はアメリカ陸軍情報部の工作員として働

いたよ。あと今の西ドイツの情報局の前身であるゲーレン機関でも働いた。私の愛する祖国が共産主義の旗の下統一されるなど吐き気がするからね。共産主義者との戦い方を徹底的に教えたよ』『中佐』が事もなげにそう言つてのけた。

「で、ですがフランスは文句を言わなかつたのですか？」

「言えるはずがないさ。新しく成立したフランス政府の高官に私の協力者がいたからな。自分から首を絞めるような真似をあの高官がするはずがないさ」

ニヤリと笑いながらそう言う『中佐』に、ロツツエは同じSS大尉なのに自分との格の違いを感じずにはいられなかつた。自分がSS大尉になれたのは戦争末期故のことであろうから、それを差し引くとしてもそんな大胆な真似ができる気がしない。

「ただ……、民主主義というのはどれだけ非合理な理由でも民衆の意思をいうものを無視できんらしく、しぶしぶと言つた感じでアメリカに文句を言い始めてな。だがC I Cの将校たちは反共闘争の有力な戦士をむざむざ失う選択をすることを拒み、私に偽名の、だが、本物のパスポートを用意して南米に逃がしてくれたのだ。

それからというもの、私はボリビアの国籍を取得して軍人たちと友好関係を構築した。そしてバリエントス大統領が軍事革命政権を成立させてからは私がC I Aとの橋渡しを担つたのだ。そしてアメリカ軍と協力してあの調子乗りのチエ・ゲバラを抹殺したのだ』

「ゲバラを!」

ロツツエは思わず叫んでしまつた。反米で有名な革命家で、キューバ革命の立役者の一人であり、その死は世界的なニュースになつたものである。その人物を殺す作戦に参加していた人物が目の前にいるのはちょっと信じがたがつた。

「そんなんに驚くことか？　あんな小物、あの大戦に参加していたら大して有名にもならずに戦死していただろう。ゲバラはただの惨めな冒険主義者にすぎん。マスコミがつくりあげた幻想、その幻想を信じた民衆が伝説に奉りあげただけだ。第一、あいつの功績は何だ？　なにもないだろう。あんな馬鹿がフランスで散々私を手こずらせてく

れたジャン・ムーランより有名になつてゐるとは世も末だ」
どこか寂し気に『中佐』はため息をついた。ジャン・ムーランとはフランスのレジスタンスの英雄である。仲間から密告され、ゲシュタポに捕まり、拷問に耐え切れず死亡した英雄。亡骸がパリのパンテオンに葬られている。

「あなたはジャン・ムーランになにか思い入れが？」

「思い入れというより尊敬の感情があるな。一度自分が設立した海運会社の仕事でフランスのパリに行つたことがあるのだが、その時もパンテオンに行つて献花したよ。あのムーランがもう墓の中で動かないのだと思うなぜか悲しみが込上げてきてな……」

『中佐』の話をロツツエはうなずきながら聞いていたが、あることに気づいて真顔になつた。

「待つてください。フランスに行つたんですか？ 南米に来てから」

「そうだが？」

「それであなたを一番追いかけている国がフランスですよね？ 今のフランスは自分たちのルーツをヴィシー・フランスではなくレジスタンスにあるつて主張してますから、レジスタンスと果敢に戦つたあなたを許しはしないはずです」

「その時の写真で、たしか、クラルスフェルトとかいう女のナチ・ハンターに元SS大尉と特定されてね。その報告を聞いて私が移送したユダヤ人の母親と一緒にこのボリビアまで乗り込んできた。まあ、ユダヤ人の方はいい。戦争中、ドイツとユダヤは敵同士だつたんだ。憎まれて当然だ。

だが、クラルスフェルトがそいつに協力していたことにショックを受けたよ。同じナチ・ハンターとはいえ、アイヒマン逮捕に協力したヴィーゼンタールとかいう強制収容所の生き残りとは違う。あの女はドイツ人だ。戦争中は子どもだつたな。そんな女が西側の洗脳されて私を糾弾しているのかと思うとな

そもそもフランスに行かなければよかつたんじゃないかと思つたが、『中佐』の嘆きをロツツエはよく理解できた。SSはドイツの正義を信じ戦つたのである。なのに今のドイツの人間が自分たちを犯罪

者扱いし、裁きを求めてくるというのは悲しみを感じずにはいられないのだ。

勿論それは『中佐』やロツツエの見解は主観的なものであつて、他の視点から見ればまた別なのであろうが、少なくともいまに国民社会主義の理想を捨てていらないナチ残党にとつては疑いの余地がない真実であつた。

「ところでゲンハルトSS中尉。君にはまだ忠誠心が残っているかね？」

この問いに、ロツツエはムツとした。

「愚問ですね。忠誠こそ我が名譽。それがSSの信条です。SSに入隊してからもう33年になりますが、それでも10月1日に正式入隊した時の誓いは忘れていませんよ」

「では、SS大尉。もしこの地で国民社会主義国家を創設するという計画があるなら参加していいかね?」

今度の問いにロツツエは困惑の表情を浮かべたが、内心では感情が高揚してくるのを感じた。

「それは……参加したいですね。一部のネオナチのように理念の欠片もない乱暴者がやつてるような名ばかりのものであるなら、御免こうむりたいですが」

この返答に『中佐』はにつこりと笑みを浮かべた。

「それなら安心してくれ。その指導者は私がするつもりだ。無論、我らが総統の足元にも及ばないだろうが、それでも他の奴よりは立派にやってみせる自信はある」

「あなたが指導者ならば、協力を惜しまないと約束しましよう」

ここまで言われて否やはなかつた。話を聞く限り『中佐』の政治センスは確かであり、指導者として仰ぐにたるとロツツエには思えた。少なくとも場当たり的な反共闘争しかしてこなかつた自分よりははるかに指導者に向く。

「そう言つてくれるなら心強い。期待しているぞカメラート同志」

それからロツツエはその『中佐』のグループの一員となり、政治工作に没頭した。そして1970年末にボリビアが民政に移行する前

後には詳細な計画ができあがっていた。

まず極右過激派の軍人たちにクーデターを起こさせる。そのクーデターで自分たち国民社会主義者が協力して発言力を強化し、アンデス山脈に隣接するドイツ系住民多数地域の自治政府を報酬としてドイツ系で独占し、なし崩し的に独立宣言を出して第四帝国を建設するという計画だつた。

行動部隊を集めるとさほど手間はかからなかつた。南米は治安が悪いので傭兵が多く、彼らを雇うことで優秀な兵士を確保できたし、指揮官も『中佐』がボリビアで基盤を築きながら集めた元SS・国防軍将校を据えた。

さらに『中佐』は国民社会主義者世界連合のボリビア支部長でもあつたので、第四帝国創設計画があることを仄めかしたら世界中の元NSDAP党员、元SS隊員、国民社会主義者、ネオナチなどといった人材がWUNSが開拓したルートを通つてボリビアへとやつてきたので文官の補充も大した苦にはならなかつた。

おまけに元SS将校が重職を務めているオーストリアの兵器会社から大量の武器を融通してもらつていた。中には最新式の戦車まであつた。南米ではまだ旧式戦車が主流だったので、ハツキリ言つて過剰な兵器である。

これらの人材と兵器に囲まれて『中佐』は行動隊“死神のフイアンセ”を編成した。それは在りし日のSSを彷彿させる部隊であり、ロツツエはその中の一部隊を任せ、自分の息子も指揮下に加えた。

そして来る1980年7月17日にクーデターを決行。ボリビアの極右政権が成立した。ロツツエ達“死神のフイアンセ”は第四帝国創設が既定の未来であると確信し、高らかにハーケンクロイツの旗を掲げ、ホルスト・ヴェッセル・リートをはじめとしたNSDAPの歌を歌つて行進した。

「これから第四帝国が始まるんだ……！」

「それはよかつた、でいいんだよな親父？」

17歳の息子デュライが首を傾げながらそう言つたが、ロツツエは氣にも止めなかつた。

しかし第四帝国創設の夢はあっけなく瓦解した。成立した極右政権が国家事業としてコカインの密売に精をだしており、その市場になつたアメリカの怒りを買つてしまつたのだ。

アメリカはソ連率いる東側諸国と対峙する西側諸国の盟主だが、いくらボリビアの極右政権が反共を掲げているとはいえ、自國に害が及ぶとあれば黙つてなどいない。あらゆる手段を使つてボリビアを攻撃し、ボリビアは国際社会から孤立した。

そして極右政権は国際的な非難を浴び、国内の反発を抑えきれず、1982年に崩壊した。“死神のファインセ”の構成員のほとんどがボリビアを去つたが『中佐』は留まつた。生涯を賭けた理想が敗れた現実に、意氣消沈したようであつた。

そしてロツツエも家で数日間抜け殻のようになつて暮らしていたが、やがて決意すると息子を自室に呼んだ。父の部屋に入つたデュライは驚いた。父が頭に拳銃を突きつけていたからである。

「なにやつてんだ親父!？」

「なに、今更だが、主君の後を追う気になつただけさ」

「いくら第四帝国だつて？ の創設に失敗したからつて思いつめすぎだろ！」

デュライがそう叫ぶのに、ロツツエは苦笑する。ロツツエは自分の息子に国民社会主義の理想を叩き込んだりはしなかつたのである。なぜかというと国民社会主義の勢力は民主主義や共産主義と比べて絶望的なまでに劣勢であると認識していたからであつた。

自分は自分の意思で国民社会主義に忠誠を誓つた。だが、息子はそうではなく、国民社会主義の理念に従う義理はないと考えたのだ。無論、自らの意思で自分と同じ理想を信じるならばともかく、そうでなければどんなイデオロギーを信じようが、親子の縁を切るだけで止めはしないつもりだつた。

デュライはそんな父の気持ちも知らず、どんなイデオロギーも信奉せず、ただただ銃の使い方とか世間様との付き合い方とか、要するに自分が生き抜く術を学ぶことしか興味がなかつたので、今までずるずると関係が続いていたのだつた。

だが、もう自決する覚悟を決めているロツツェはそのことを息子に言つて聞かせるのが最後の義務であるように思えた。

「今回の一件で国民社会主義は敗れた。いや、もしかしたら總統が自決した1945年の春にはもう終わつていて、このボリビアで私が参加したのはその残照にすぎなかつたのかもしれん。ドイツ第三帝国、總統、SS、そして国民社会主義運動。私が忠誠を誓つたすべてのものは完璧に潰えた。ならもうこの世に未練などない」

「……後悔しているのか？ ナチズムを信奉をしたこと？」

デュライは国民社会主義のことをあえて蔑称のナチズムと言つた。今までであれば父は不快な表情を浮かべたものだが、今日は苦笑しただけだつた。

「後悔？ 後悔などしていない。ただ……」

ロツツェは視界がぼやけていることに気づいた。

「虚しいな。自分が信じた理想の果てが、こんなものとは……。無念だ」

デュライは驚いた。父が泣いている。あのいつも堂々としていた父が。

「デュライよ。人生の先達として一つ言い残しておく。この先どのような正義や理想を信じようがかまわん。だが、たとえそれを貫いたとしても、私のようになにひとつ後世に残せないこと（になる？）人間も存在するのだと覚えておくがいい」

そう言い終わるとロツツェは拳銃の引き金を引いた。父の死を見届けた息子は咄嗟にナチス・ドイツ時代の拳手式敬礼を死体に向けてした。父に対して最大の弔いがそれだと本能的に思つたのである。

そしてそれが終わると、デュライはなにかに突き動かされるように身の回りの品を整えて生まれ育つたボリビアから出国した。

そして異国之地で新たな住処を見つけた頃、『死神のフイアンセ』で自分の面倒をよく見てくれた『中佐』はその後、フランスに身柄を引き渡され、裁判にかけられて終身刑を宣告されたことをデュライは知つた。

父が言つたように、ひとつの時代、ヨーロッパを席巻した思想の残

り火が、もう二度と蘇ることなく潰していくのだと、デュライは理屈ではなく感情の次元でそれを実感した。